

図書館蔵書に対する評価は、その量よりも質にあることは言うまでもないが、その質的条件の中にどのような稀観本（きこうぼん）

本館

稀

観

本

所蔵

世間に流布されていない珍しい書物）が収蔵されているかがある。については専門の立場から本館所蔵の稀観本を紹介することとした。

の中から

西洋服飾稀観書(19) Journal des Dames et des Modes

—フランクフルト・アム・マイン版とパリ版—

教授 石山 彰

紛らわしい書名のモード誌が、このところ連続登場になっているのをお許し願おう。というのも、本館蔵書の重点の一つに古モード誌があり、従来ほとんど入手不能と考えられていた古典の大物が、日本経済力の高まりに伴って私たちの眼前に現れたからである。この現象は西洋古典書全般についても、またファッション産業やアパレル産業そのものについてもいえることであろう。事実、世界のモード界の合言葉の一つに“ファッションを調べるなら日本へ行け”というのがあるとかないとか……。

首題のモード誌は、19世紀初期のものとしては一・二を争う著名誌の一つで、1799年創刊、1848年廃刊（仏版は1797年3月創刊、1839年1月廃刊）となっているから、実寿命は約半世紀（仏版は40年10か月）ということになる。総裁政府時代に生れ、ほぼナポレオン1世と運命を共にするこのモード誌は、だからフランス史の中でも最もダイナミックで劇的な年代の証言の一つになっている。本誌に高い評価

が与えられる理由も、ここにある。もはや全巻を掌むことは稀有であり、本館所蔵分は次のとおりである。

〔383. 135 J1~12〕 Journal des Dames et des Modes, 12 vols, Francfort sur le Mein, 1805~1826（不揃い）。縦19cm×横12.5cm。

なお、これとは別個に、本館の初期に購入していた同書のパリ版が3巻あり、本稿での仏版というのは、このパリ版のことである。どちらもフランス語で記されている。この年代のモード誌は大抵A5判程度の大きさの週刊誌で、本誌の場合は毎週34ページ、それに銅版手彩色のファッションプレートが1枚付いている。年間52週分の冊子は、普通半年分を1冊にバインドするから、22年分で12巻というのは、もちろんとびとびで、明細を記すと以下のとおりである。

1805年前半 1806年後半 1807年1~10月 1809
年後半（仏版はほぼ通年） 1819年通年（仏版）



パケールのドレス
ずれも一八〇九年
①②は仏版 ③は同年の独版

1820年前半（仏版も同じ） 1822年通年

1823年通年（仏版は前半） 1826年前半。

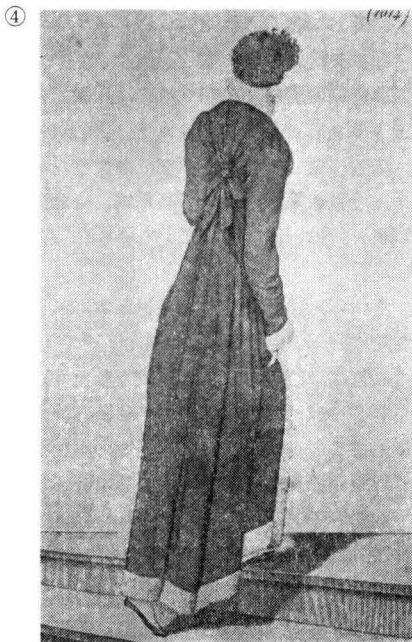
部分的にはあるにせよ、私たちははからずも、両方のエディションを比較する幸運に恵まれた。なお、これには他にブリュッセル版のあることが知られ、かなり遅れて1818年に創刊されているが、最終刊は不明である。したがって、ここで述べるのはフランクフルト版（以下独版と呼ぶ）についてであり、パリ版との比較も限定的な一部についてであることをお断りしておく。

仏版は最初スレクという人物とクレマン夫人によって発刊され、プレートの銅版画はラ・メザンジェールの協力によっていた。発刊2年後にしてアルカン社に併合されるが、独版が創刊されたのもこれ以後のことである。なお、仏版は廃刊2年前の1837年10月以降、出版権はラ・メザンジェールの手に移り、同時にタイトルも“Gazette des Salons”，と変更されているところからこの呼称も使われる。独版と仏版との異なる点は、まず一見して、仏版の方が美しく立派だということであろう。それは造本や装幀のことではなく、インディア紙の紙質の相異からきている。独版は本文もプレートも総体として薄手の紙が用いられている関係上、刷りが映えない。また、内容的にも両者はかなり異っていて、相互独自の編集がなされており、単に同一版の流用でないことが知

られる。やはり相互の権益が主体に護られているのであろう。紙質を薄くした理由の一つは、輸送か輸入税などの関係で、価格との釣り合いが必要だったのではないか。その証拠として独版には毎号の表紙に新聞印紙税のスタンプが押されている。

こうした相異は、プレートに一番端的に現れている。仏版は1枚のプレートに1態という形式を堅持して、いわゆる *Costume Parisien* というプレートの名を高からしめたのに対し、独版はそれをダブルポーズに結合するか（第3図）、ないしは背景に別種の添加物を付してイメージを変えているのである（第5図）。この相異については古田司書課長が詳細に照合済みである。他方、本文について、これらのプレートが挿入されている独版の1809年9月10日号（No.1とする）と同年11月19日号（No.2とする）について簡単に目次を記しておこう。No.1は、デュフスノワ夫人作の短篇小説「愛のお守り」、デュ・ドゥファン夫人へのヴォルテールの手紙、パリ通信、パリモード、詩、散文、シャレード（文字謎などと訳される）、No.2の目次は、13世紀の逸話：アングラン・ド・パルコまたは陽気な姉妹、ティトゥス風の髪型、パリ通信、逸話、パリモード、詩、散文とシャレード、となっている。

なお、独版には時折仏版よりもほぼ1か月程度の遅れが見られることを付記しておこう。



① 部分的に渦巻き状になったティトゥス風巻毛の髪型
② マムル絹のシヨール
③ 白い長手袋に黄色の靴
④ 花型紐飾りつきの麦藁帽
⑤ 絹のフラシ天製のトーク帽
⑥ カシミア地のルダンゴットにはフラシ天の飾りが施されている
⑦ 白い長手袋
⑧ 緑色の靴

④ 絹のフラシ天製のトーク帽
⑤ カシミア地のルダンゴットにはフラシ天の飾りが施されている
⑥ 白い長手袋
⑦ 緑色の靴
⑧ その独版であるが、背景は全く別構成になっている
⑨ いずれも一八〇九年